
ベンケイの漢修行

ひろにか@そらかけ同人誌制作中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベンケイの漢修行

【Zコード】

Z5824P

【作者名】

ひろにか@そらかけ同人誌制作中

【あらすじ】

獅子堂家にやつてきたベンケイ（頭脳体）は、つつじを見返すために高嶺に弟子入りを志願する。それにOKが出された結果、獅子堂家では奇妙な修行が始まるのだった。

(前書き)

獅子堂姉妹とベンケイのひたすら馬鹿馬鹿しい話です。ちょっとセクハラ的な展開はありますが、お約束すぎてエロくないので、ご期待なさらず（笑）。詳しく考へてはいのですが、多分、本編終了後。

たのもお！」

どんどんどんどんどん！

「んもー・・・こんな朝早くに誰? 非常識な人だなあ・・・」

とある日の早朝、獅子堂家に響いた大声 + 戸を叩く音。他の皆は忙しく、暇な三女が寝ぼけ眼で玄関に向かつ。扉を開くと、そこにいたのは。

「ベ、ベンケイ・・・!?

人ではなく、コロニーのブレインだった。

「ワタシは漢を磨きたいのだ！」 こちらの高嶺殿に弟子入りしたい

!

「はい？」

こうして、騒がしい一日が始まった。

「まあいいんじゃない。ブレインコロニーの動向は、知つておけるならその方がいいわ」

「か、風音おねえちゃん・・・」

玄関で土下座（本人はそのつもりらしい。骨格も何も有つたものではないのでいまいちわからないが）を続けたまま動かないベンケイに対処法が分からず、とりあえず姉達を呼んできた秋葉。しかし、長女は予想外に寛容だった。

弱った三女が、次女の顔を見る。

「でも、高嶺おねえちゃんイヤだよね？　そもそも、漢を磨くのに女の人には頼むってどうなのよ？」

「そ、それは仕方なかろう。ワタシを見ても驚かず、なおかつ弟子にしてくれそうな人間など他にいないではないか！」

「それは・・・そうかもしないケド・・・」

かといって、ようやく落ち着いた我が家に来られても困るのだが。それに、ここにはレオパルドがいる。何か騒動が起こりかねない。でもまあ、本人が断つてくれるだらうし・・・とか思っていた秋葉の思惑はあつさり崩れる。

「・・・いいでしょ?」

「あれえ?！」

『本人、あつさつOKサインを出された。

「外装を外し丸腰で来るのは、なかなかの覚悟。姉さんもああ言つてこることです。来る者は拒みません」

「おお有り難い！拙僧、この御恩は忘れません！」

「僧なのは名前だけでは？宗派も何もないだらつ。いろいろ言いたい秋葉だが、早くも入りにくい空気が出来上がつていた。」

「見ていろつづじー、ワタシは漢を上げてみせるー。『アンタみたいな鉄の塊に触られても何とも思わない』などとは、もう言わせんぞお！」

「ええ、極めるのです、武の道を！」

「なんか、のつけからあつさつちが食い違つてる気がするんですけど・・・」

「そんな常識的なツッコミが、通用するわけないじゃない・・・」

不在のイモちゃん（朝は何かと忙しいのだ）に変わり秋葉のフォローをしたのは、意外なことに四女だった。

同情・・・いや、諦めがその瞳には宿つている。

それを見て、「ああこの子もオトナになつたんだなあ・・・」と
心の中でつぶやく秋葉も、既に何かを諦めていた。
いいのだろうか、この家。

* * *

素振り千回。腕立て伏せ千回。スクワットも千回。
もういいじていいのうちにもう夕方だ。

「筋肉が付くわけでもないのに、何やつてるんだろ・・・？」

「こじは獅子堂家の稽古場。

まあ見た目は、普通の剣道場のようなものだ。家にそんな場所があることが普通では考えられないのだが。

それはともかく、言わることを真面目にこなしているベンケイに、様子を見に来た秋葉がこぼす。

だが、返事には微塵も迷いはない。

「構わん、ワタシは漢を磨いているのだ！」

「じ本人が納得しているのであれば、いいんじゃないでしょうか・

・

イモちゃんもイマイチ釈然としていないようだが、そう言った。

「ベンベン、ふあいとお～」

桜は、全面的に応援の方向らしい。

「基礎は終わつたようですね。では、試合どこでましょうか」「よろしくお願ひします、先生！」

休む間もなく、高嶺から次の課題が言い渡される。
まあ彼らの場合、人間と同じように疲労するものでもないのだろう。

「どうからでも、かかってきなさい」「はい！」

竹刀（人間用の「ぐく普通のもの）を構えるによろこびとした口口
二ーのブレイン。

それに対峙するのは、胴着姿の美女。

「うわ、なんかシユールル・・・」「B級怪獣映画のワンシーンみたいですね・・・」「たかねおねーたん、Bカツプ～？」

そんな話はしていない。

好き勝手言つてる外野はやめておき、

「たあつー！」

「つおりやあー！」

当人達は大真面目で打ち合つていた。

「踏み込みが甘い！ あと、肩に余計な力が入りすぎよー。」

「オス！」

「・・・その返事は、競技が違うんぢゃないかなあ・・・」

「あの体型で肩つていうのも、どこなんでしょうね・・・」

「かたかた、こつこつ？」

更に言えば、彼は地面から浮いているので踏み込みと言われても、こんな感じで、見ている側はツツ ツツに専念している。

「でもやっぱり、おねえちゃん強いよね～」

「ええ。圧倒的です」

「ベンベンー、負けるなー！」

試合の内容については、特に語ることがないからだ。
素人ではあるのだが、その目から見ても高嶺がベンケイを上回つ
ているのは明らかだつた。

本人も、それはわかつてていたようで……

「ワタシは、負けるわけにはいかんのだああああ……」

「かハか、捨て身で撃ちかかるベンケイ。
だがしかし。

「・・・うおつ！？」

指導を参考に、地に足を付け思い切り踏み込んだのだが、濡れていた床でバランスを崩す。
そして、竹刀の先は。

むに。

高嶺の胸元に、一直線だつた。

まあ、勢いは削がれていたので怪我はないだろうが……

「お・・・お約束・・・
「ベタベタですね・・・」

観客席（あくまで名前だけ。単に入り口の辺り）から歓声
が入る。

「すいません、先生！ もう一度……………<？」

その辺のことを全く氣にせずに続きを頼むつとしたベンケイは、
師から立ち上る怒氣によつてめぐらしく付く。

「ひつやあああああつーーー！」

「ああああああつーーー？」

裂帛の氣合とともに放たれた一撃に、哀れなブレインは稽古場の
壁を突き破つて飛んでいく。

「……おねえちゃん、本氣だ……」

「QT使つてましたね……」

そんな吆きは、朦朧としていたベンケイには届かない。
どうにか聞こえたのは、高嶺の鋭い声だけだった。

「あなたのよつな破廉恥な輩は今日限り破門です！」

「ああ、高嶺さま！」

足早に去つていいく彼女を、イモちゃんが追つていいく。
残された秋葉は、ベンケイに駆け寄つた。

「えーっと、大丈夫？・・・わざとじゃないんだしも、高嶺おねえちゃんも謝ればきっと許してくれるよ・・・」

あれだけ頑張っていたのだ。慰めの言葉をかけてみたのだが・・・

「・・・やつたで・・・」

「え？」

「そうこいつとか・・・。金属がダメなら、竹刀を使えばいい」と、

「そうこいつことなのだな！」

「な、何の話・・・？」

「世話になつたな獅子堂家！ だが、次に会つ時は敵同士だ！！」

「ちよ、ちよつとー？」

何だか満足したようで、ベンケイは振り返る事無く去つていった。
取り残されたのは、三女と五女。

秋葉の口から、投げやりな言葉が零れ落ちる。

「そういえば、なんで床濡れてたんだろ・・・」

「ベンベン、桜のオイルでピカピカ～」

「ああ、桜の差し入れだったのね・・・。でもそいつの、撒くん

じゃなく手渡すものじゃないかな・・・」

まあ、飲むわけでもないだろうが。

そんな感じで立ちつくす姉と妹を、壁の穴越しに眺める通りすがりの四女さん。

「これは何か、アの一言が欲しいところである。

「今日も平和ねー・・・・・」

・・・・・ありがとうございます。

＊
＊
＊
＊
＊

そして。

「見よつづじ、ワタシは奥義を得たのだ！」
「はあ？ アナタ、今日一日いなかつたと思えば、何をテンションあげているわけ？」

つんつんむにむに。

世にも冷たい視線を向けられ、ベンケイはたじろぐ。

「ばっ、馬鹿な・・・！ 獅子堂高嶺には確かに効いていたはずなのに・・・！」

「甘いわね、ベンケイ！」のワタシをあんなお色気キャラと一緒にしないで頂戴！」

「お色気キャラ・・・？ あの大和撫子が・・・？」

「大和撫子は武器を持って戦つたりしないわ」

「はっ、確かに！」

付け加えると、素手で戦つ」ともないと想つ。

「だがつづじ、何故そんなことを知つている？ オマエと彼女は、接点が無いはずだが・・・」

「DIRTY（↙○】・】）からの情報よ

「メタなことを？！」

全くである。

「まあもつとも、ワタシは持つていのだけどね

「何い？」

「何故自分の出番が無いものを、わざわざ買わなくてはいけないのかしら？」

「ではどうして、内容を知つているのだ・・・？」

「決まっているわ。天の声よ！」

「オマエの言つてることは全くワカラナイ！」

(後書き)

しんどいわうなツツコミ役を秋葉に任せたら、何かナミが悟りました（笑）。台詞は少ないですが、オイシイ役回りをあげられて満足です。・・・我ながら、変な甘やかし方だ（笑）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5824p/>

ベンケイの漢修行

2010年12月31日05時46分発行